

中流住宅の平面構成に関する研究

第 6 報 北入り基本型住宅の中廊下型住宅への発展について—その 2 (第 2 段階, 第 3 段階)

正会員 〇 永島 潮** 同 青木 正夫 同 竹下 輝和
同 磯貝 道義 同 友清 貴和 同 宮崎 信行
同 岡 俊江 同 大津 博幸 同 深野木 信
同 中園 真人 同 秋元 一秀

① はじめに

本報では、ヨコ中廊下が発生し、前段階のタテ中廊下と連携され、さらに現在も広く見られる中廊下型住宅の平面構成へ発展する過程を段階的に考察する。

② 第 2 段階 ヨコ中廊下の発生とコの字型回り廊下の完成

STEP 4 東西中廊下の発生

タテ中廊下の完成により、客や女中の次の間の通り抜けの問題は解決されたが、茶の間の通り抜けの問題は、依然として生じる。茶の間は、家族生活の中心的部分であり、平面構成の上でも次の間・台所・玄関を結ぶ中心に位置している。従って第 1 段階では茶の間-次の間はフスマ(障子)で仕切られており、座敷-次の間と同様に空間の連続性が強く、茶の間の日常生活行為の次の間への展開は容易であった。一オ、玄関-台所の間にも位置していることから、通り抜けは必然的に生じており、特に女中の茶の間の通り抜けの問題を解決することは、重要な課題であったと思われる。

そこで茶の間に玄関の間と台所を結ぶ廊下が発生することになるが、タテ中廊下の場合、設備部分への廊下であるため、仕上げは当初より板張りであるのに対して、ヨコ中廊下の場合、次の間-茶の間という連続性の強い 2 つの機能空間を分断する形となり、通路

の確保と次の間-茶の間の連続性保持という矛盾する要求を折衷的に解決する手段として、この段階の初期の例に、「タタミ廊下」という形で中廊下をとっている場合がある。(図-1)

この「タタミ廊下」で空間をつなぐ手法は、江戸期の中・上流武家住宅や明治期の大邸宅和徳部の構成に多く見られ、図-4・図-5に見られるように、多くは一箇中の畳を敷きつめた部屋を連続させて各部屋をつないでいく形態をとることが多い。各室の間仕切をとり払えば広い一室空間となり、各室機能のはみ出し行為の緩衝空間としても機能していたと思われる。「間」によって住宅内の機能領域区分を行う武家住宅や農家の田の字型平面の構成法にその源流を求めることも出来よう。(図-6 参照) 又、部屋の通り抜けの不便さについては、明治期中流住宅改良における大きな関心事であり、明治 30 年代に於ては、すでにその一つの解決法として「タタミ廊下」の手法がとり入れられていたことが、うかがわれる。*1

*1 伊東忠太の「過去三年間日本における建築談論の批評」(明治三十六年二月)
通常家屋にて部屋又は部屋をすぎて他の部屋に入るのが無暗に多い。畳廊下、縁側などはこの欠点をすくう唯一の得策であるのか。障子を開ければ、全家一室となる構造、一室における咳払いまで全家、小さい家では隣の家まで聞こえるような構造」
当時大阪で開かれた工学会臨時大会で塚本靖教授がおこなった「住家の話」(明治三十六年四月)でも、「一般に日本の建築の配置はきわめて幼稚で、殊に上方では一つの室を通らねば他の室にはいられぬ。少し注意した家では、この点を改良してタタミ廊下をとり、側を設けているが、これが唯一の改良法であろうか。・・・
西山卯三「日本のすまいⅡ」

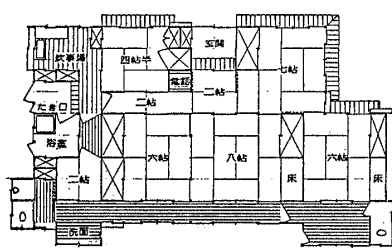
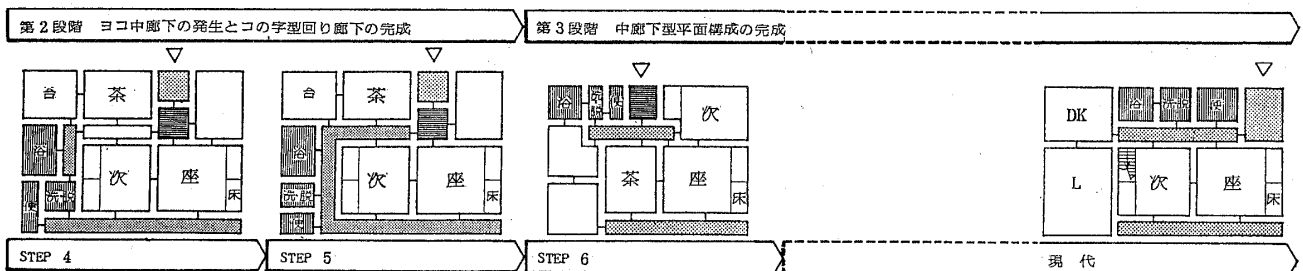


図-1 三井田川 M.33

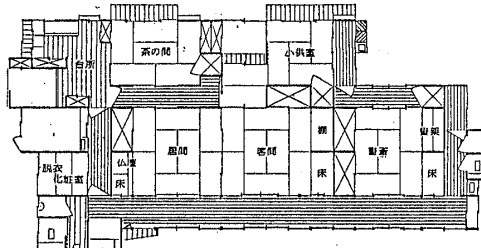


図-2 三井田川 S.11

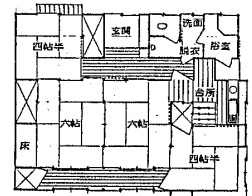


図-3 三井田川 S.27

図-1は明治33年の例であるが、茶の間と次の間の間に、巾半間の2帖ほどの畳廊下がとられている。この場合は、茶の間・次の間との壁のつきオを見れば、隣室空間のはみ出し行為の緩衝帯としての機能より廊下としての機能が優先していたと思われる。このことは次のステップでこの廊下が板張りになることから明らかである。(尚、タテ中廊下に関しては、この平面では脱衣室を介在しており、その意味では、前ステップより後退している。)

STEP 5 中廊下・縁の連結による動線処理

図-2 この段階では、畳廊下部分が完全な板張りの廊下となり、南縁・タテ中廊下・ヨコ中廊下による工の字型の廻り廊下を形成することによって、動線的な解決はなされた。しかしこのヨコ中廊下の板張りは単にタタミが板張りに変化しただけではなく、次の間と茶の間の連続性を弱めてしまうことを意味する。このことは、次の間と茶の間のそれぞれの室の独立性を強める反面、茶の間での日常生活行為の次の間への展開を不利にすることにもつながっていると考えられる。又、この段階では、まだ玄関の間は畳敷として確立しており、略式応待の間という機能と、「間」の通り抜けという格式性を兼ね備えたワッシュン空間として機能していたと思われる。

図 築る段階 中廊下型平面構成の完成

STEP 6 前段階において、明治期の北入り基本型住宅は、縁と中廊下を通過動線とする平面構成のまじまりを見せ、居室の通り抜けは解決されたが、ヨコ中廊下による茶の間の独立室化は、次の間との連続性の分断や居住条件の低下をもたらした。特に茶の間の採光・通風の問題については、大正期に既に指摘されており、また南面化による解決についても言及されていた。^{*2} 当時の団らんの形態については、必ずしも明らかではないが、このような家族生活部の中心である茶の間の南面化の要求が存在していたことは明らかで、また一方向南面化のための条件は、既に設備部分の台所南側における集中化と設備技術の発達という形で成立していたと判断される。そしてこのことが茶の間の南面化と設備部分の北面移動を可能としたものと考えられよう。

*2 大江スミ子「応用家事精義」佐野利器「茶の間の改善と客間の左遷」

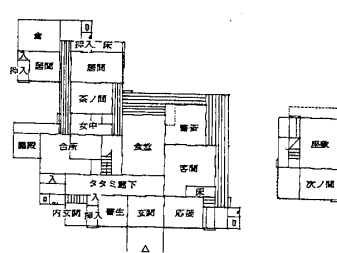


図-4 M.31
大村徳国「北大工学部研究報告
NO 21」より転載

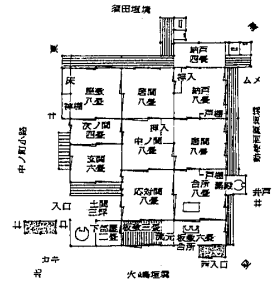


図-6 文化2年
中ノ町南側西より第二の住居
(七番目に入居)
大河直射「江戸時代の中下級
武士住居と近代都市住居」
より転載

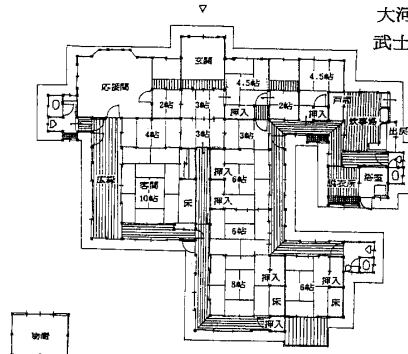


図-5 昭和初期
福岡県警察本部長
宿舍現況平面図

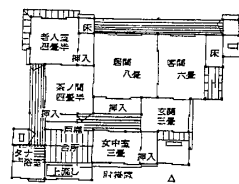


図-7 T.10
「各種貸家建築図案及利回りの
計算」近間佐吉 著 より転載

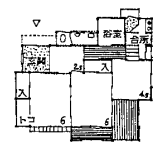


図-8 S.4
同潤会の平家1戸建住宅の
平面(3),赤羽I,萩窪J型。
西山卯三「日本のすまい」
勤草書房より転載

図-3の例に見られるように、設備部分のヨコ中廊下北面への移動は、便所・浴室への動線をヨコ中廊下により全て処理出来ることになり、タテ中廊下が消滅した結果、廊下の短縮と玄関の板張り化、平面形のコンパクト化を更に促進している。しかし、この茶の間の南面化は一気に起ったとは思われない。図-7に示す例は、茶の間と次の間は隣接して配置されたが、茶の間と台所の関係や浴室への動線処理等は推測で、その意味では後退している。又、玄関の間の板張り化については、図-8に示すように、設備の北面集中化、茶の間の南面化がなされても、畳敷の間として確保されている例も見られ、図-3の例に見られる段階までには様々な模索があったと思われる。

ここに到って「中廊下型平面」の完成を見ることになるが、この平面形は茶の間の洋風化や私室の確立という新たな展開をみせながら、都市中流住宅の主流として大きな位置を占めているのである。

*1九州大学教授・工博 *2 同講師 *3 同助手 ** 同大学院生